

個性念力は微妙なるがゆゑに、常識では理解し難きものがある。微妙なるがゆゑに種々迷信の誘因となつてゐることも多いやうである。理解し難きことは、理解し得る時節到来を待つ外はない。一の不可思議に惑ふて、十の迷信に陥つてはならない。迷信の己を毒し、他を躓か^つすることの多きは、洵に慨嘆の至りである。我等行者は、自己念力の微妙なるを信じて、自律自助に善用利益するは可なり。然れども一步たりとも、不用意に迷信の域内に踏入り、己を毒し他を躓か^つすことがあつてはならぬ。迷信は心身疾患の素因にして、

阿吽阿の御導きに戻り、遂には身を亡ぼす遠因である。怖るべく慎むべきは、迷信なりと知るべし。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

昭和十年十二月八日

同行者の心得

阿吽阿。 絶對靈格・智・妙・覺に就いては、自分勝手に偏りたる思を起さず、己を忘れて自然と同化したるが如く、立機熟すれば、何人たりとも之を覺り得る筈であるが、其の過程を一言に要約すれば、智性明かになることである。智性明かになるとは、數々聖典『阿吽阿經』を讀誦し、能く其の内容に通曉して知行一致、思案行爲自ら中和の御道に則ることである。それが即ち地上に於ける最勝の安樂である。行者機根の優劣によりて、過程に長短の相違はあれ

ども、努力して息むことなければ、遂には必ず絶対靈格阿吽阿に合ひ奉る筈である。その行程は、或は靜坐冥想し、或は萬有の推移を達觀し、内外相待つて阿吽阿を自覺するのである。何所までも自彊息まざることが肝要である。

以上の如く絶対靈格の自覺、現象界の始・中・終を悟り得るまでの過程は、人によりて遲速あれども、絶対其のもの、御活動は、萬人の齊しく人生に即して常に實感する所にして、其の一端たる人情の美妙、因果の妙理の如き、誰か敢て之を絶対靈格の顯現にあらず

と言ひ得るや。既に人情の美妙、因果の妙理を透して絶対靈格の御活動を實感する者は、それが即ち阿吽阿の御愛御慈悲であることは、『阿吽阿經』を一讀すれば、即座にはつきり悟り得るであらう。既に阿吽阿の御愛御慈悲をはつきり悟り得れば、必然感激して衷心禮讚謝に禁へぬ筈である。

茲に人あり、阿吽阿の御愛に感激して、衷心禮讚謝の一念發起すれば、未だ絶対靈格と現象界の始・中・終を大悟徹底するに到らずと雖も、其の人はそれだけ既に智性の明らかな個性であるから、此

の感謝の一念の發露する所、必然御導きに順ひ奉るがゆゑに、斯の人は既に現世平和の享樂者であり、未來も亦其のまゝ平和の樂境へ遷るべきである。現在未だ平和の樂境に到らざる輩も、一旦阿吽阿の御愛を自覺し、感激して禮讚謝の一念發起すれば、此の一念の善因に依り、未來も亦人界に生を享け、何の時に正覺成就して、永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉るべきである。阿吽阿の御愛は、一切を導きて向上せしめ給ふのであるから、如何なる窮境に行き詰つても、決して自暴自棄してはならぬ。唯禮讚謝の一念を堅持し、内に

求めて御導きに順ひ、衷心平和を涵養して、前途幸福を期待するの
がよいのである。

現世の平和が其のまゝ、未來へ延長するのであるがゆゑに、過去の
罪惡を眞箇に懺悔し、斷然我慾を捨て、煩悶を解脱して衷心平和な
るにあらずして、徒に他を恃んで未來平和を期待するは、これ無明
幻想である。恰も麥の種子より稻の發芽するを待つが如し、世間豈
に此の如き不合理あらむや。阿吽阿の向上御引導と、背戾行爲制節
の御愛、因果の御則は、至れり盡せりである。然るに尙ほ其の上に

強て非望を懐くと雖も、至れり盡せる御愛の外に、更に與ふべき何物があるであらうか。唯だ悲望を懐く輩の見逃してゐる御導きに順ふ一途の残りてあるのみである。譬へば慈愛に富む賢明なる父母の膝下に養育せらるゝ兒輩が、朝夕無理ねだりするとしても、なにとて無理の望が容れられんや、唯彼等の前途の爲に訓誨あるのみであらう。この洵に見易き道理を悟れば、未來の安樂平和を願ふものは、現世に於て自己を改良して、善因を播く外に手段あるべからず。自己の改良方法は、唯だ鄙劣なる我慾に耽らず、自律自助・交互扶持

する人道を實踐し、御導きに順ひて日々平和に生活することである。阿吽阿の御愛御慈悲をはつきり覺る者は、衷心禮讚謝の念溢るゝがゆゑに、其の言行自ら中和の御道に則る。中和の御道に則るがゆゑに、内に惱なし。内に惱なきがゆゑに日夜平和である。是れ唯だ最初日常生活に即して阿吽阿を覺り、其の御愛御慈悲に感激して、禮讚謝の一念發起したるがゆゑである。嗟禮讚謝なるかな、禮讚謝なるかな。禮讚謝こそは現世安樂・未來幸福の尊き種子なりと知るべし。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

昭和十一年三月八日

俊

誤れる學說の流毒を歎く

根本智妙動と言ふも、全一活動本性と言ふも、明らかなる智性の自由活動と言ふも、齊しく無窮に彌る唯一御存在の自由活動である。即ち阿吽阿である。之を人界個性に即して觀ずれば、箇々欲の遮蔽なき智性の自由活動、即ち人道一般の實踐がそれである。之を概括して清淨活動とも言ふ。一五乃至一七、二一、二九、八〇、一五九頁参照

清淨活動とは、又一切思案行爲自ら中和統齊の御道に叶ふ交互扶持の働のことであるから、堪忍・仁愛・禮義・廉恥・自律・自助・

忠信・孝・悌等々がそれである。

二一、八
〇頁参照

自律と言ふことは、五戒とか十戒を守るといふが如く、さう簡単に片付けらるべきものではない。國憲法規の遵守は勿論、人道一般を實踐する意義であるから、自律自助と言ふことは、人の人たるべき道を實踐しつゝ、自助すると言ふことである。假令多少の出入を免れずとしても、此の人道の基準を逸してはならぬ。故に未だ自律自助の意義を辨へざる者は勿論、既に道德上の大體知識を有し乍ら、その實踐を怠る者あれば、其の隣人は之に教へ、忠告し、導き、助

けて自律自助の大路に立たしめねばならぬ。此の如き協力も亦所謂自律の内容、交互扶持の働である。一六、八二、
八三頁参照 萬有を觀察すれば、電子・原子の小より、大は天空の星辰萬象の關係も、亦全一活動本性の顯現、交互扶持の働、即ち根本智の妙活動である。二一、八
二頁参照 前記の如く國憲法規それ自體も、それを遵守することも、共に全一活動本性に基くのであるから、凡そ國法の遵守は、強制的服従にあらずして、明らかなる智性の自由活動が、自ら帝おのミカの則になぞらふのである。それが理想的至治の世である。

西洋の或學說に、主體は内に分裂の運動を藏する自己同一的全體である。辯證法とはかゝる動的なる自己同一的全體が、自ら分裂對立しつゝ、自己同一を回復實現し行く自己運動の道程なりと主張し、社會は萬人が萬人に對して個人的利己心を以て争ふ戰場であると形容してゐるのがある。

前記學派の主張する所に依れば、分裂對立は先天的宿命にして、避くべからざる主體本有の必然性なりとするものゝやうである。それゆゑに、此の學說を根據とする一派の社會主義者は、階級闘争を

以て人類の必然的運動なりと主張し、多衆を煽動し、幾億の同胞をして對立闘争せしめ、求めて人類社會を暗黒慘愴ならしめてゐる。洵に歎息の至りに勝へぬのである。

人類社會に隨時、不和・對立・反抗の事實あるは、古來歴史の證する所であつて、敢てそれを否定するのではないが、それを以て避くべからざる人類本性の必然的發動なりと観るは、全く前記學說の謬見である。凡そ萬有の運動は、本來全一活動本性に基づくものであるが故に、假令隨時發動する背戾行爲が、頓に斷絶するに至らず

とも、終に至善中正・圓滿和同の御道に合致すべきは、全一活動體系の必然的理趣である。偶々對立・反抗運動の起ることは、是れ皆個性の自由に基づく箇々慾偏見の致す所である。箇々慾の嚮ふ所は千差萬別・利害錯綜するを以て、互に分裂・對立・鬭争するに至るのである。而して御導きに背きて行へば、阿吽阿の無限愛は、其の背戾行爲を一として漏らすことなく制節し給ふがゆゑに、阿吽阿の常時向上御引導と個性の背戾行爲と、背戾行爲制節の因果則とは、恰も渦紋を爲すがゆゑに、其の事跡のみに就いて見れば、この學派

の所謂正・反・合なる型に暗合すれども、彼等の觀る所の原因は、一つの臆斷にして眞理に非ず。彼等は此の運動を以て、主體本性必然の發動なりとするのであるが、眞實は個性の自由偏見に依つて生ずる隨時の出來事である。

萬有は阿吽阿の無限愛御導きに依り、我執偏見を捨離して遂に至善中正に止り、現世安樂・永久幸福の妙境に入らしめ給ふ約束であるから、利己的偏見を捨離し、阿吽阿の御導きに順ひて交互扶持すれば、不和・對立・反抗の原因茲に斷絶して、斯の社會は平和の樂

土となり、全一活動本性阿吽阿の妙境が實現するのである。偏見が背戻の因であり、背戻が被制節の因であるから、常に御導きに順ひて思案行爲すれば、隨時起る所の向上・背戻・被制節の渦紋運動は、爰に斷絶して無臭無色智性の連鎖活動に還元し、そこに阿吽阿境が現するのである。四五、四六、七四乃至七六頁参照

爰に到つて、主體は内に分裂・對立の運動を必然的に藏すると觀る學說の全然誤謬なることが、阿吽阿教の照明に依つて明白になり、前途悠久の無數人類の人生觀が、不可避的相互鬭争の悲觀に代りて、

中和の道に依る現世安樂・永久幸福期待の樂觀となるのである。七五、七六頁参照
南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿
俊

昭和十一年三月八日

阿吽阿教會

一 阿吽阿教會は、阿吽阿の御愛御慈悲に感激して、衷心阿吽阿に禮讚謝する輩の精神的集團である。

一 阿吽阿教會は、阿吽阿の無限愛に則る會員日常の言行が、其の儘隣人の模範となり、同時に之が傳道の最も親切なる方法なりと信ずるのである。

一 阿吽阿教會は、右の如く自給自辨の阿吽阿先覺者が、各自の言行模範的體現傳道する建前なるを以て、特別なる布教専務の役員

を置かぬことが本旨である。

一 阿吽阿教會員は、阿吽阿の御愛御慈悲に感激して禮讚謝し。經典『阿吽阿經』を研究し、時に靜坐冥想し、偏見我慾の遮蔽を破除して、智性を明らかにせんと努力し。阿吽阿の無限愛に則り、會員互に慰安提挈して人道を勧め。中和統齊の御道を隣人に傳へ、夫れが次第に環境・社會へと傳播するやう努むるを以て自己の本分と心得。全人類が、俱に現世安樂・永久幸福ならんことを一向念願する輩である。

一 阿吽阿教會員は、前記數項の目的達成のために、會員二人以上會合する所を、總て本教會の聖堂なりと會得し、各々其の身を持つること、溫良・恭謙なるべきである。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

俊

昭和十一年三月八日

跋

此の度「阿吽阿」、「感謝生活」、「子孫に告ぐ」、「講演筆記」、及び「阿吽阿教行者以下五篇」を輯めて一冊と成し、多少辭句の修正を施し、又句讀や送りがなの訂正等も加へ、改めて『阿吽阿經』と題して發行することにした。

昭和十一年十月十八日

富島俊次郎

阿吽阿教行者篇追加

『阿吽阿經』第六十八頁「講演筆記」中に記されたる通り、予は第一絶対觀に關し、第二現象界の始・中・終觀に關し、第三信仰對救濟に關しての既成宗教の説には、何分疑ありて承順し能はず。五十年の間心に據なく、洵に不安の日を送つたのである。が六十歳前後の數年間に、自ら段々思ひ浮びしものあり、それが昭和四年の秋に至りて「阿吽阿第一」の如く結著したのである。この時初めて豁然として歡喜し、爾來衷心阿吽阿に禮讚謝して已まざる次第である。

然るに、近頃はのか仄に聞くに、世間には阿吽阿教はよく備りたる宗教ではあるが、それは既成宗教の善き部分を集成したからのことで、独自の創見は持たぬが如く評する人が少くないとのことである。が洵に意外な妄評である。

阿吽阿教は、純なる創見宗教である。而してそれが活いたる眞理であると思ふ。故に眞の宗教である。

既成宗教にも亦全然邪教にあらざるかぎり、その教理信條中、個性經典五頁一行、同二三頁六行ながらの教祖の智性の動機に基く言行にして、眞理と觀

るべきもの、介在するを見るは不思議にあらず。それと共に、箇々偏見に基く錯覺迷信の甚だ多く存在することも亦事實にして、それによりて古來無數人類が、思想的に紊亂迷惑し、いつを限りともなく邪道に輪廻煩悶する状態は、洵に歎息に堪へざる次第である。

既成宗教の教理信條中に介在するものも、亦それが眞理である限り、必然統一原理、即活いたる眞理、即阿吽阿より出でたることは言を俟たず。眞の宗教世に出でたるによりて、茲に眞理・迷信の區別が判然したるに過ぎず。然るに阿吽阿教は、既成宗教の善き部分を

集成したものなりと見るは、顛倒妄論である。

眞の宗教阿吽阿を廣く世界に傳へて、錯覺迷信の人類を覺醒し、相率ひて共に阿吽阿の無限愛を意識しつゝ、常に禮讚謝して自律自助・交互扶持人道を實踐し、現世安樂・永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉ることが、阿吽阿教行者の本分・念願である。

試に阿吽阿教の創見要處數點を左に掲げて、經典を讀む人々の參考に資す。

一、阿吽阿は、無窮に彌り自由活動する唯一御存在。阿吽阿は、時

空を様とする御存在。阿吽阿は、有無を超越する御存在。

右に對し既成宗教の絶對觀如何？

二、阿吽阿の意志的存在は、御自愛御自處である。阿吽阿自己同一が、自己の内に部分的連鎖活動することが、全一阿吽阿の動的存在である。而して全一の該總する萬境と、部分的智性の必然稟有する萬境とは、部分の連鎖活動を通して成る全一妙動に必要なる機構である。

既成宗教の動的絶對觀如何？

三、阿吽阿教の萬有開發觀は、阿吽阿の内に連鎖活動する部分的智性、偶々萬境該總阿吽阿の或境に滞り、その境自己稟有の相應境に響應して旺盛發達し、その境遇現象したのが萬有個性の始である。假令は主命に依り全國內を巡視する者、偶々邊鄙に滞留すること稍々久しくして土俗に感染し、ために元の文化生活を忘却したる鄙人の如し。一切萬有の創造說、隨緣眞如說、人法皆空說は、いづれも之を信ぜず。

既成宗教の開關觀如何？

四、唯一御存在阿吽阿の御愛は、無限御自愛である。既成宗教の説くが如き差別愛にあらず。信ずるものと、未だ悟らざるがゆゑに信ずるに至らざるものとの區別なく、哀願するものと、せざるものとを差別せず、一切萬有を常に平等に愛して、進展・向上・引導し給ひて息むことないのである。況んや萬境の最上界の人類は、一人としてこの御愛に漏るゝものあるべからざるは言を俟たず。

斯の如く御愛は、無限にして一切萬有均霑するのである。が、受愛者感受性の利鈍によりて、その感應に甚大の相違あるがゆゑに、

我等御導きに順ひ奉る者は、常に祈禱して御引導に對する自己の決心念力を強め、以て感得と實行を敏速ならしむる用意が肝要である。阿吽阿教行者の日々禮讚謝に繼ぎて必ず祈禱する所以は、此にあるのである。祈禱第三、皇座祖國第四、祖先考妣第五、子孫第六、同一五頁三行乃至五行、自三五頁三行至六行、四九頁四、五行

祈禱念力の微妙は言ひ難し。唯だ慎で經典に掲げた通り阿吽阿の御愛に信賴するに限るべし。一五頁自三行至五行一五四頁八行、一五五頁全部

決心念力の微妙なることは、錯覺迷信に入る縁となる虞なしとせず。故に阿吽阿教行者は、萬一にも迷信に陥ることなきやう深く深

く注意を拂ふのである。自一五六頁一行至一五七頁二行

阿吽阿教は、極力錯覺迷信を排撃するものである。四九頁七、八行、南無阿吽阿三一頁自三行至

行八

萬有は、此の如く無限の御愛に恒常不斷均霑するがゆゑに、人たるもの、箇々欲偏見の障りなき無我の状態において、人生に關して起すことあるべき隨時の思ひ出は、それが即ち阿吽阿の御導きであり、自己智性の顯現である。二九頁自三行至六行 而して其の動作に實現知行一致するものが、即ち實踐道德である。一五頁 正直

如上無限愛に均霑する萬有中にあつて、利根なる人類に限り、愼
 で御導きに順ひ奉り、人道一般を實踐して平和を享樂し、いつしか
 根本智を自覺して、常に禮讚謝しつゝ、現世安樂その儘未來に延長、
 永久幸福の妙境に合ひ奉るのである。

御導きに背戻し、箇々欲を趁ふて輪廻流轉するものは、因果則な
 る廣き意味の御愛を蒙りて、背戻行爲矯正制節の懊惱苦痛を感受す
 るのである。原因である偏見我執を捨離せざる限りは、生々世々箇
 箇欲を趁ふて輪廻流轉し、繰返し々々悠久に懊惱苦痛の結果を感受

せねばならぬのである。然れども恒常不斷の御引導と、悠久に彌る
 矯正制節の御施爲は、兩々提挈作用して、悠久の間に萬有は、次第
 次第に進展向上し、箇々欲執著薄らぎて、終には萬有悉皆一も漏る
 るものなく、前者同様に至善中正に止り、事物の認識をたゞし、自
 律自助・交互扶持して、人道實踐圓滿和同し、根本智を自覺して無
 限愛に感激し、常に禮讚謝して現世安樂その儘未來に延長して、無
 臭無色智性の活動に還元し、永久幸福の妙境に合ひ奉るのである。
 阿吽阿は、我等の日々讚美し奉る通り、御愛を以て部分界を導き

給ひ、御因果則を以て齊へ給ふ中和統齊の御道である。六頁 五行

阿吽阿教は、阿吽阿は純愛であることを知るのみ、呪詛罰極なるもの、あるを知らず。呪罰は箇々偏見の事にして、全一本性の事にあらず。譬ば慈愛深き父母は、不孝なる頑童を見て、その愚昧を憐みて悪事を制止し、將來を誡めはすれどもその人を憎まず、況んや遠き過去の過失を罰するが如きは、父母の情にあらざるが如し。

既成宗教の人生觀罪惡觀如何？

五、前述の如く萬有は、悠久中間期に於て、阿吽阿の常時向上の御

引導と、間斷なき惡業制節の御愛に依つて、終には至善中正に止り、

八三頁自五行至八行

無限愛に感激して禮讚謝しつゝ、事物の認識をたゞし一一六頁自五行至六行

自律自助・交互扶持圓滿和同し、無臭無色智性活動、永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉るのである。

既成宗教の現象界終焉觀如何？

阿吽阿教行者は、個性は智性と箇々欲箇々機能の合同五頁一行一三三頁六行なる

ことを知れるがゆゑに、古來難解とする實在と現象の觀かたについても、個性の實相智性と、一境に偏して現はれた假の姿四三頁二、三行南無阿吽阿一六頁一乃至

行四のこと、観るのである。

又人の性は善なりとする主張に對し、人の性は悪なりとする主張する二つの異見は、一は智性のみ偏した觀察にして、他は箇々欲箇々機能のみに着眼したる議論と見るのである。故に我等は、教育一般も、一身の修養も、大體の目的は、偏見我執を捨離して智性を明かにし、多く經驗を積み、博く學びて事物の認識をたゞし、自律自助・交互扶持人道の實踐を誤らず、常に禮讚謝して現世安樂・永久幸福を希ふことにありと信するのである。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿

昭和十二年九月二十六日

富長俊次郎

阿吽阿經 終

昭和十一年十二月十五日發
昭和十二年十二月二十日印
昭和十二年十二月廿五日第二版發行

行

阿叶阿經典與付

定價 金八拾錢

東京市芝區伊皿子町二十六番地

著作者 富岡俊次郎

東京市芝區伊皿子町二十六番地

發行者 富岡清行

東京市芝區伊皿子町二十六番地

發行所 阿叶阿會

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 共同印刷株式會社

版權
所有





終